

猶龍——安藤劉太郎——関信三の軌跡

日本における保育者養成のパイオニアの生涯を探る

立浪 澄子

はじめに

関信三といえは、保育関係者の間では日本で最初の幼稚園の初代監事（園長）として、あるいはフレール恩物の最初の紹介者として知られているのが普通であろう。

私は一九九二年來、保育者養成史の比較教育的研究に従事したのがきっかけで、関が保育制度史や内容史だけでなく、保育者養成史の面においても非常に重要な役割

を果たしていたことを知り、そのときから彼に強い関心を抱いた。

それまでの私の関に対するイメージは、まことにばくぜんとしたもので、「数奇な生涯を過ごした謎の人物」、もしくは「フレールの恩物を紹介し、日本の保育方法の基礎を作った人物」程度のものでしかなかった。

しかし少しずつ調べていくうちに、関が明治の文明開化に西欧の近代文化とプロテスタンティズムに触れ、そ

れまでのきわめて日本的な価値観との相克に直面し、苦悩し続けた啓蒙的知識人の一人であったことを知った。その上、もしかしたら男女平等の理念に初めて目覚めた一人でもあったのではという、かすかな予感まで感じ始めたのである。

そんな私にとってまことに幸運であったのは、富山県内に住む民俗学者で、浄土真宗大谷派の僧侶でもある伊藤曙覧氏との出会であった。数年来親しくお世話になっているこの方から私は宗派関係はもちろんのこと、それ以外にも実に多くの資料の所在を教えられ、また提供していただいた。そのほかにも学生時代の友人、図書館の司書の方々を初め、実に多くの方にお世話になった。この原稿はそれらの方々の協力なくしては、とうていできるものではなかった。この場を借りて深くお礼を申し上げたい。

一、研究のあゆみ

最初に研究の出発点となったのは、津守真先生が一九

六二年、六八年に本誌に発表された論文¹⁾である。ここにはその当時の関に関する基本文献がほぼ網羅されており、最初はこれを手がかりに史料を探索した。

そのうちに先の伊藤氏が織田頭信氏の論文³⁾を送ってくださった。私はこの論文で初めて関の女子教育に関する文献の書名を知った。さっそく機会を見つけて国会図書館に出向き、この書『古今万国英婦列伝』（一八七七年発行）のマイクロ・フィルムを閲覧し、コピーを取った。その後私はこの書を読んで大きな衝撃を受けたのである。

*注 『日本保育学会第46回大会研究論文集』P.257において、

本書の出版を一八七五年としたのは転記ミスである。したがって本書は関の処女出版とは言えない。記して訂正し、お詫び申し上げます。

本書は上下二巻よりなり、英国ビクトリア女王を初めとして総勢十人の女性の伝記を載せている。関自身の筆による「小引並凡例」（一八七五年脱稿）によれば、本書はアダムス著『列女言行録』フルロム著『婦人史』そ

の他を原本とする抄訳で、彼は本書を編訳した意図を大
約次のように述べている。

「最近西洋各国においては男女同権の説が盛んである。
しかしわが国では女性を隸使し、玩具扱ひさえしている
し、女性もそれに甘んじている。恥ずべきことである。

史書をひもとけば、その雄功壮事少しも男子に劣らない
女性もいる。わが国でも女性の良材を養成すればその公
益大であろう。この書にはクレオパトラ、エカテリー
ナなど史上不評の女性も含まれているが、私はあえてこ
れらの女性を本書に加えたものである。なぜなら人間は
だれも神の子ではないのだから、一失をもって全功を否
定することは正論ではないと考えるからである。私はな
によりも史上卓越した女性を紹介することによって、
男性に女性を蔑視する癖を除去せしめ、女性には自分を
自棄する弊から脱し、その気風を伸ばし、意志を強く
し、度量を弘め、才知を拡充してほしいと願うものであ
る。」⁴⁾

当時このような女性論はきわめて稀れて、わずかに土

居光華編『近世女大学』（一八七四年一月発行）や、福
沢諭吉著『学問のすすめ 八編』（一八七四年四月発
行）に「そもそも世に生れたる者は、男も人なり、女も
人なり」という一論があるくらいで、多くはまだ三從や
七去を説く女大学の域を脱していなかった。

このような時代に、関はたとえ女であつても「国ヲ富
シ兵ヲ強ウシ民風ヲ化シ土功ヲ興ス等ノ雄功壮事豈男子
ニ譲ランヤ」と称えられる女性を世に紹介した。しかも
クレオパトラを「愛国の傑女」と賞し、エカテリーナ二
世を「太宗君主」と称えるなど、その評価の視点はゆが
んだ「女帝」イメージに毒されていない。私は驚嘆せざ
るを得なかつた。

一八七〇年代にこのような女性観を持ち合わせていた
関という人物はいったい何者だったのか。どのようにし
てこのような女性観を持つに至ったのか。私はいつのま
にか関をどんどん追いかけていられぬ気が持ちは
なっていた。

関の出身地、愛知県幡豆郡一色町では一九七〇年に町

史を発行しているが、この町史には関の伝記が収められている。著者は郷土史家の杉浦廉平という人だが、町史完成後まもなく物故されたとのこと、現在では執筆のための史料もなにも残っていないという。これはまことに残念であった。

ある図書館で見つけたのが『横浜町会所日記』であった。そこには安藤劉太郎（関の別名）が一八七〇（明治三）年十二月十五日、高須屋清兵衛に同道し、町会所を高須屋の納金日延べの願いに出向いたという記録があった。高須屋清兵衛は関と同じく三河国一色の出身で、関の実家安休寺の檀家として、安休寺には多大の援助を惜しまない豪商であった。しかしこのころは家運も傾き、商売は窮地に陥っていた。旧恩を忘れない関の律儀な一面を窺わせてくれる記録ではないだろうか。

このあと、私は横浜に住む私の学生時代の友人小宮まゆみさんに電話し、関の横浜時代の史料を捜してもらった。彼女が横浜の古いミッション・スクールの一つである成美学園女子高校の歴史の教師をしていたことも私に

とっては非常に幸いであった。

彼女は一九四四（昭和十九）年発行の小沢三郎著『幕末明治耶穌教史研究』の初版本のコピーを送ってくれた。ここには関が太政官へ送った諜者報告が写真入りで



掲載されており、私が直接みた再版本には写真は省かれていたので、これは非常にありがたかった。また彼女はあちこち捜したのちやっと上智大学図書館で、植村正久が関について触れた記事が掲載されている「福音新報」を見つけてくれた。これによって佐波亘著『植村正久とその時代』がその出典を「大正十一年十一月・福音新報」としているのはミスで、正しくは大正十年十一月発行の「福音新報」一三七六号であることがあきらかになった。

彼女はまた横浜在住で謀者の研究をしている坂井久能氏の研究レジュメも送ってくれた。一九九三年八月、私達はこのレジュメに出ていた地図をたよりに横浜の野毛を訪れ、関が明治初年に住んでいた「大聖院下豆腐屋隣、片山柳太郎」を捜した。目的の場所はなだらかな坂に面した住宅の並びで、もしかやと思った豆腐屋はやはりなかった。その日はちょうどお祭りらしく、御輿が出てにぎやかな雰囲気だった。激しく車が行き交う交差点に立って、私は幻の関の姿を追ったが、維新前後の横浜の

面影はもはやどこにも感じられなかった。しかし一二〇年も前に女性の自立を願って保育者養成に力を尽くしたのではないかと思われる一人の明治初期知識人の生涯を掘り起こし、保育者養成の意義を探りたいという思いは私のなかでさらに膨らんでいった。

二、関信三の生涯とその業績

関信三は一八四三年（天保十四）年、当時の三河国幡豆郡一色村の浄土真宗大谷派安休寺に生まれた。父はすでに亡く、長兄晃耀が住職を継いでいた。晃耀は63歳で大谷派の最高学階である講師に任ぜられた人であるが、一八六二（文久二）年、完成まもない横浜天主堂を見学して憤慨嘆息し、当時から破邪護法（キリスト教を排斥し、仏法をだいに守ること）を強く主張していた。関がキリスト教探索に身を投じたのはこの兄の影響が大きいと思われる。

少年期の関は12歳のとき、猶龍の席名で本山の当時の末寺子弟教育機関、高倉学寮に入寮した。14歳のとき豊

後日田の咸宜園に遊学し、その後津藩の儒者土井警牙の門下となった。その後彼は本山に設置された洋学とキリスト教の研究機関である護法場に学んでいたが、一八六八（明治元）年秋長崎に派遣され、千歳、慈影とともにキリスト教探索に当たることになった。

このころの関（猶龍）については、『一色町誌』が「幼少から性温順聡敏、よく仏学を修め、本願寺雑僧中の秀才といわれ門主の寵遇をえた」と記し、徳重浅吉氏が「大谷派宗門の生んだ一異才」と評している。

長崎へ西下した関は他の二人とともに時には生命の危険を冒してまで探索に従事したが、やがて一八六九（明治二）年秋大阪に移り、大阪洋学校で英語を学ぶ。一八七〇（明治三）年秋、彼は再び弾正台大忠・渡辺昇の内命を受けて今度は横浜に潜入し、外国人宣教師らの動静を探った。渡辺は当時の東本願寺門主厳如と親交があった人で、このときから彼は名を安藤劉太郎と改名する。

横浜ではM・E・キダーやM・ブラインら女性宣教師とも交流し、一八七二（明治五）年春日本基督公会の設

立に参加し、J・H・バラから日本初のプロテスタント教会の一員として洗礼をうけている。むろん目的は諜報活動にあった。弾正台廃止後は太政官諜者として、宣教師や日本人信徒の動静や教線の伸張について報告を送り続けている。

同年九月、彼は大谷派門主の継嗣現如に同行し、のちに同派の幹部となった松本白華や石川舜台、同じく後に新聞記者、文人として著名となった成島柳北とともにヨーロッパに渡った。そして一八七三（明治六）年一月一行と別れて一人イギリスに赴き、レッズング（Reading）のミッションナリー・カレッジに入学したという。しかし四月にブロッケレー（Brackley）に移転、そこで誰に何を学んだかはわかっていない。翌一八七四（明治七）年八月ロンドンに戻り、一八七五（明治八）年一月帰国した。帰国時期は明治七年という説もあり、この点は今後の研究課題である。

帰国後、一八七五年（明治八）年九月には東京開成学校（現東京大学）の助教員に任ぜられ、ついで東京英語

学校兼勤となり、一八七六（明治九）年二月には東京女子師範学校（一八七五年十一月開校）の専任の英語教師となった。

同年十一月には同校内に日本初の幼稚園（東京女子師範学校附属幼稚園）が開園し、彼はこの園の初代監事（園長）となった。それ以前同年七月、彼はすでに『幼稚園記』四冊を翻訳、東京女子師範学校から刊行している。これは幼稚園に関するまとまった著作としては日本最初の文献である。ついで一八七八（明治十一）年四月には『幼稚園創立之法』、一八七九（明治十二）年三月には『幼稚園法二十遊嬉』と立て続けに翻訳刊行した。他に『幼稚園動物図解』という訳書もある。これらはいずれも以後長く日本の幼稚園教育の手引書となったもので、草創期における幼稚園教育の理論と實際を方向付けたものである。

このような実績から彼はこれまで主として日本における幼稚園教育の実際的創始者であり、フレーベルの最初の紹介者として知られてきた。恩物という訳語を造語

したのも彼であるといわれている。しかしフレーベルがそうであったように、関もまた単に幼稚園を興しただけでなく、そこで保育する保母の養成にも精魂を傾けた人物であった。

一八七八（明治十二）年二月、今は大阪府知事となった渡辺昇の発案によって氏原銀、木村末の兩名が保母見習いとして上京、約七か月にわたって東京女子師範学校附属幼稚園に学んだ。これが日本における保育者養成の嚆矢である。氏原の回想によれば、二人は上京後その足で関を訪ね入学を請うたが、学校側ではまだその準備ができていなかったようで、手続きに手間取った様子が記されている。しかし関の配慮で二人は当時の附属幼稚園保母近藤浜宅に無事落ち着くことができ、やがて入学を許された。¹¹⁾

関は氏原らが上京して三か月後の一八七八（明治十二）年五月、保母練習科開設の稟申書を中村正直（東京女子師範学校摂理）に提出した。同校から六月十日に出された設置の伺いは二十七日に裁可¹²⁾、九月開業の運びと



◀関信三の墓（東京谷中宗善寺内）

なった。しかし、志願者が一、二名しかいなかったため、十月三十一日新たに給費規則を定め、その結果翌一八七九（明治十二）年二月、十一名の入学者をもって附属幼稚園内に保母練習科を設置、一八八〇（明治十三）

年七月、第一回の卒業生を出した。しかしこの科はその後すぐ廃止されてしまった。¹³⁾

この間、関は主任保母松野クララの通訳として保育法を講じ、生徒らの厚い信任を得ていたが、一八七九年十一月、志半ばにして物故した。関が亡くなった後、生徒らは彼の菩提寺にフレーベルと同じ第二恩物を型取った墓を建立した。

三、今後の研究課題

関の伝記的研究においてネックとなっているのは、彼のイギリス時代の足取りである。『一色町誌』の記録はまだ充分な裏付けがなく、果たして彼はイギリスで何を学び、それが幼稚園開設とどのような関係にあるのか確定できていない。私自身は今のところ、関は単に英語が堪能であったために頼まれて文献を翻訳し、通訳の労を取っていたのではなく、彼自身のなかに相当主体的な幼稚園教育、保育者養成に対する熱意と悲願が存在し、それは彼にとって確固たるものであったのではないかと

推察している。今後はさらにこの点について実証的な研究を重ねていきたいと思う。

(富山女子短期大学)

8 横浜開港資料館編『横浜町会所日記―横浜町名主小野兵助の記録―』一九九一 P 56

9 同上、注7

10 徳重浅吉『維新政治宗教史研究』目黒書店 一九三五 P

〈注〉

434

1 津守真「日本幼児保育史の研究・22、文明開化と幼稚園紹介の事情・23、関信三の幼稚園紹介」『幼児の教育』61巻2号 一九六二

11 氏原銀「思い出くさ」竹村一『幼稚園教育と健康教育』所収 ひかりのくに昭和出版 一九六〇 P 160

2 津守真「関信三の生地を訪う―『文明開化と幼稚園紹介補遺』―」『幼児の教育』67巻8号 一九六八

12 明治十一年文部省日誌(自第一号至第九号)国立公文書館内閣文庫所蔵 一八七八

3 織田顯信「我国幼稚園教育の先覚者安休寺猶龍(別称安藤劉太郎関信三)伝攷」『同朋大学論叢』第27号 一九七二

13 文部省第七年報(明治十二年)、第八年報(明治十三年)国立公文書館所蔵 一八七九、一八八〇

4 関信三編訳「古今万国英婦列伝」一八七七 国立国会図書館所蔵

5 福沢諭吉 岩波文庫『学問のすゝめ』岩波書店 一九四二

P 77

6 同上、注4

7 一色町誌編さん委員会『一色町誌』一九七〇 P 736